

鉄道公安隊特急「雷鳥」金沢・能登殺人事件

新庄雄太郎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

鉄道公安隊特捜班の南公安主任と部下の高山公安官と鶴岡公安官と小海公安官は京都発の特急「雷鳥」17号の車内でスリをはたらいた男・望月 勝を捕えた。ところがスリの証拠がないためして釈放したが、その頃、金沢の兼六園で毒殺死体が発見された。そして、第二の殺人が起きた。闇に潜む第三の影とは…。旅情豊かな金沢―山代温泉―能登路を舞台に描く長編ミステリー

目次

第1章	特命捜査	1
第2章	列車スリ	6
第3章	金沢	10
第4章	能登金剛で水死体	13
第5章	4年前の事件	18
第6章	対決	21

第1章 特命捜査

3か月前、東京都内のマンションで転落死した。

だが、現場には遺書のようなものはなかった、警察では自殺とみて捜査をしていた。

この日、高山はある列車広報誌を読んでいた。

「へえー、特急「かがやき」で行く金沢の旅か。」

「いいわね、特急「かがやき」か。」

「俺は、寝台特急「北陸」もいいけど、一度は「かがやき」に乗って金沢や能登や富山へ行つて見たいよ。」

と、鶴岡は言った。

「どれどれ。」

と、小海も記事を見た。

「東京から上越新幹線「あさひ」に乗って長岡から北陸本線経由の特急「かがやき」に乗れば金沢へ行けるのね。」

「うん、東京から金沢までは3時間58分で行けるんだ。」
「凄いのね。」

1992年の3月14のダイヤ改正で、東海道新幹線「のぞみ」が東京から新大阪まで2時間30分で運転開始されました、なお、この新幹線には名古屋にも京都にも止まらず、「名古屋飛ばし」で話題になった。

ちなみにJR西日本では長岡と金沢へ結ぶ特急「かがやき」が運転本数が増えて、自由席が設けられた。

信越本線・北陸本線経由の特急「白山」は1往復に変わった。特急「かがやき」は6往復体制になった。うち1往復は、和倉温泉と福井まで運転されている。

又、特急「きらめき」には3列式グリーン車が連結された。

「へえー、福井と和倉温泉にも運転開始されたんだ。」

「うん、僕も一度乗って見たいなって。」

と、高山は自慢そうに言った。

「おはよう。」

と、南がやって来た。

「南主任、おはようございます。」

と、同僚たちは挨拶する。

「おっ、高山何呼んでるんだ。」

「ああ、今特急で行く秋の旅を見ていたんです。」

「ほう、なるほど。」

「秋の北陸は、紅葉もいいからな。」

と、南主任は言った。

「あつ、そう言えば特急「雷鳥」がグレードアップ車が登場したぞ。」

「えっ、本当なんですか。」

「ああ、「雷鳥」の13号・23号・32号・44号の2往復だ。」

「あつ、それって上沼垂色ですね。」

「そうだ。」

「僕も一度乗って見たいな「雷鳥」。」

と、高山は言った。

そこへ、高杉班長がやって来た。

「おい、南、高山、鶴岡、小海。」

「あつ、班長、おはようございます。」

「何か用でしょうか。」

と、小海は言った。

「すぐに室長室に来てくれ。」

「えっ。」

南は、高山と小海と鶴岡を連れて室長室へやって来た。

「南公安主任以下3名、配置につきました以上。」

と、南は敬礼した。

「ところで、室長今日は何の要件でしょうか。」

「実は、南と高山達に特命捜査をやってもらおうと思っただね。」

「えっ、特命捜査。」

と、南と高山と鶴岡と小海は驚く。

「そうだ、実は都内のマンションで女子高生が転落死した。」

「ああ、その生徒が自殺ではないかと。」

「そうだ、この事件については警視庁の刑事が話をされる。」
と、大湊室長は言った。

「ああ紹介しよう、こちらが警視庁の刑事だ。」

と、高杉は言った。

「警視庁・捜査一課の田所です。」

「目黒西署の小坂です。」

「早速ですか、事件の事を詳しく話していただけないでしょうか。」

「はい、3か月前、都内のマンションで女子高生が転落死しました、死亡したのは音ノ木坂学院に通う花型 るい17歳と判明しました。」

「彼女は自殺何ですか。」

「いや、それが遺書ありませんが自殺ではないかと。」

「それで、聞いたんですか。」

「生徒に聞いたところ、いじめたこともないって言っていました。」

「と言う事は、いじめの自殺ではないと言うのですか。」

「いや、詳しいことは言えないのですが、るいの友人に聞くとイジメていないって言っていました。」

「そうか、やはりいじめかあるいは教師の体罰って事も考えられますね。」

「ええ。」

「これは、間違いなくマンションの転落死と関係ありそうですね。」

「うん、それで大湊室長、その4人にどんな捜査をするんだ。」

「このツアーに参加して事件の捜査をやってもらうことにしたから、南と高山達に捜査をさせることにしたと。」

「おう、なるほどね。」

「任せて下さい、室長。」

「じゃあ、頼むよ。」

「はい。」

南と高山と小海は、装備課へ行き拳銃を取りに来た。

「お願いします。」

「はい。」

装備係の人は、4人に拳銃を渡した。

「はい。」

南と高山は、コルト・ローマン4in

鶴岡は、コルト・ローマン2インチクラシックモデル

小海は、ブローニングM1910

と、携帯し、ホルスターに入れた。

鉄道公安隊特捜班は、危険な任務の為拳銃を携行しなければならぬ。

「装填、6発完了。」

と、南と高山と鶴岡は言う。

「装填、7発完了。」

と、小海は言った。

「それで、特捜班の方では事件の捜査はどうなんだ。」

と、大湊は高杉に行った。

「ええ、実は今「ひかり」と「雷鳥」と「あさひ」と「かがやき」の列車スリを追っています。」

「なるほど、特捜班は列車スリを追っているのか。」

「はい、後は指名手配中の容疑者も追跡捜査しています。」

「そうか、よし、南と高山達に特命の捜査を任せよう。」

「はい、やらせてください。」

「これにより、鉄道公安隊に特命捜査を行う、以上。」

「はっ!。」

と、南と高山達は大湊室長に敬礼した。

大湊室長は列車の時刻を言いながら、二手に分けて捜査をすることにした。

「まず、上越新幹線だと7時36分発の「あさひ1号」に乗り、長岡には8時57分、長岡からは9時04分発の特急「かがやき2号」に乗れば金沢へは11時34分に着く、東海道新幹線の場合は7時07分に「ひかり3号」に乗るとして京都へは9時42分に着く、京都から9時45分発のL特急「雷鳥17号」に乗り、金沢へは12時26分に到着する。」

「なるほど、この列車の中にすりや指名手配犯が乗る可能性があるっ

て事ね。」

「そうだ。」

「それで、帰りの方は。」

「帰りだと、金沢から13時48分発の「雷鳥32号」に乗れば京都へは15時52分に到着する、15時56分に「ひかり16号」に乗れば東京へは18時32分に到着する。」

「よし、僕と小海さんは「ひかり3号」に乗ります。」

「私と鶴岡は「あさひ1号」だ。」

と言つて、南と高山達は捜査を開始した、だが、金沢と能登で連続殺人が起きるとはだれも予想はしなかった。

第2章 列車スリ

次の日南と鶴岡は、7時36分発の上越新幹線「あさひ1号」に乗って警戒に当たった。

「上越新幹線にはいないなあ。」

「全くどこへ行ったのかな?。」

「乗る列車が違ってたのかな。」

「さあな。」

「この客は越佐路へ帰る人も多いからな。」

「スリはいないなあ。」

「上越新幹線にはいなかったな。」

「犯人は長岡に潜伏しているんじゃないかな。」

「うん、奴は「かがやき」に乗るかもな。」

「えっ、「かがやき」に。」

「うん。」

上越新幹線「あさひ1号」は8時57分に長岡へ到着した。

「やっと、長岡へ来たぞ。」

「あさひには乗ってなかったな。」

「とにかく、特急「かがやき2号」に乗れば見つけれよ。」

と、南は言った。

「とにかく、連絡してみようか。」

「ええ。」

南は、早速無線で連絡した。

「高山、そっちの方はどうだ。」

「今、「ひかり3号」の中です。」

「そうか、列車スリの方はいたか。」

「いや、「ひかり3号」にはいません。」

「よし、引き続き警戒してくれ。」

「了解。」

と、無線を切った。

「と言う事は、「かがやき」ではなく「雷鳥」って事も考えられますね。」

「そっか、スリはきつと「雷鳥」に乗るんだ。」

「と言う事は、犯人は485系お宅つて事も考えられますね。」

「ああ。」

9時04分 南と鶴岡は長岡から北陸本線経由の特急「かがやき2号」に乗り込んで金沢へ向かった。

「犯人は必ず、乗る筈だからな。」

「あれ、スリがないぞ。」

「本当だ、乗ってないぞ。」

「確かに「かがやき」は485系だから乗るとばかり思ってたんだよ。」

11時34分特急「かがやき2号」は金沢に到着した。

「上越新幹線には乗らなかったな。」

「ああ、ガセネタかな。」

「ええ。」

そう言つて、南と鶴岡は金沢鉄道公安室で待機した。

一方、高山と小海は京都から北陸本線経由のL特急「雷鳥17号」に乗つて警乗していた。

高山と小海が乗つた大阪と金沢を結ぶL特急「雷鳥17号」は大阪を9時40分に発車し、新大阪、京都、敦賀、武生、福井、芦原温泉、加賀温泉、小松、終着金沢へは12時26分に着く、約2時間の旅である。

「現れるかな?。」

「必ず現れるわよ。」

と、小海は言つた。

高山は時刻表を見て見ると、敦賀と武生を過ぎて次は福井と芦原温泉、加賀温泉にも止まると確信した。

「あれ、あの人かな?。」

「ん、あつ。」

と、男は車内を走り回っていた。

「ちよつと、待ちなさい。」

と、小海は追いかけた。

「止まれーッ。」

と、高山は男を確保。

「何故、逃げたんです。」

「俺がスリしたって言うのか。」

「往生際が悪いよ、あなたは財布をすろうとしたわ。」

「おい、俺がやった証拠はアンのか？、えっ。」

と、男は怒鳴った。

「とにかく、金沢公安に連行しよう。」

「小海さん、次の駅は。」

「もうすぐ終点の金沢です。」

「金沢か。」

12時16分、L特急「雷鳥17号」は終着金沢に到着した。

南と鶴岡は、公安官を連れてホームへやって来た。

「高山、スリを逮捕したって。」

「それが、スリはやっていないって言うんだ。」

「何だって。」

「この男か。」

「はい。」

高山が逮捕した男は、望月 勝35歳だ。

金沢鉄道公安室

「この人がスリですか。」

「いいえ、この人じゃないわ。」

「似てるけど、別人だわ。」

と、旅行ツアーの女性が言った。

「そうですか。」

「望月じゃないのは、確かだね。」

「ええ。」

そして、事情聴取の後、望月は釈放された。

「本当に申し訳ありませんでした。」

と、高山は望月に謝った。

「いいよ、気にしてねえから、じゃあな。」

と言って、金沢駅を後にした。

「スリはガセでしたね。」

「ああ。」

「とにかく、金沢観光だ。」

「あつ、あのバスかな？」

「ええ。」

第3章 金沢

南と高山達は金沢駅から観光バスに乗り込んで、金沢を観光した。

犀川大橋 大正13年 登録有形文化財

この写真は野町側より見る

大橋を渡ると右に雨宝院、まっすぐ進むと野町交差点左へ行くと寺町寺院群。

「こちらが、有名な室生犀星の文学碑でございます。」

と、バスガイドが案内した。

「あんずよ花着け 地ぞ早やに輝け あんずよ花着け あんずよ燃えよ」

「さすがですね、よく知っていますね。」

「ええ、金沢に行く前に調べたんです。」

このあと、桜橋へ向かった。

桜橋

南主任と高山は金沢でカメラを持って犀川の河畔を歩き桜橋まで来ました。

「ここが桜橋ね。」

「そうだよ。」

「川を見ると橋が近く見えるのね。」

と、小海が言う。

「そうだよ。」

兼六園

「今、紅葉が見頃なんだって。」

「本当、キレイね。」

「うわーっ、紅葉もきれい。」

「本当だ。」

「ねえ、あれ何かな。」

「どうしたの。」

バスツアーの女性客は、何かを見つけたのだ、それは女の絞殺死体だった。

「きつ、キャーッ！」

2人は、悲鳴を上げた

「あつ、この女は確か。」

「前に室長が話していたいじめ自殺の女子高生ね。」

「まさか、金沢で殺されるなんて。」

2時間後、石川県警捜査一課の小沢警部と城島刑事と熊田刑事が到着した。

「警部、被害者の身元が分かりました。」

「本当か。」

「東京在住の東雲学院の谷川雅代、17歳です。」

「東雲学院だと。」

「まさか。」

と、高山と小海は驚いた。

「何だ、君は。」

と、小沢は言った。

「鉄道公安隊の南です。」

「同じく鶴岡です。」

「何、鉄道公安隊。」

「はい。」

「東京公安の高山直人です。」

「同じく小海です。」

「知ってるんですか、この生徒は。」

「はい、警視庁からいじめ自殺事件の事で捜査していたんです。」

「なるほど、南と高山達はバスツアーに参加して捜査していたって事か。」

「はい。」

「それで、死因は。」

「恐らく、お茶のペットボトルの中には青酸系の毒が混入されていたんです。」

「と言う事は、毒殺か。」

と、鶴岡は言った。

「この被害者の高校生はいじめと関係があるのかな。」

「おい、現場にこんな物があるぞ。」

「どうした、高山。」

「この高校生は東京から新幹線に乗って来たんじゃないかな。」

「ああ、そうらしいな。」

「東京から新幹線って事は、名古屋か新大阪ですかね。」

「上野から夜行に乗って来たって事は考えられるかな。」

「なるほど、夜行か。」

「夜行って事は、寝台特急「北陸」か夜行急行「能登」か。」

「それも、考えられるな。」

第4章 能登金剛で水死体

ひがし茶屋街

「まあ、可愛い店ね。」

「本当ね。」

「でもさ、楽しい旅行みたいだな。」

にこの旅行は、まるで高校の修学旅行みたいだ。

「秋は、紅葉だし、金沢はいいね。」

「うん。」

「ちなみに、何処から来たの。」

「俺は東京から来た、鶴岡。」

「へえー、名前は。」

「えっ、私は小海はるか。」

南と高山達は、ひがし茶屋街で旅をしている女性と知り合い、二人で金沢へ観光する事になった。

尾山神社

「神門に来たな。」

「うん。」

「1人で行くと寂しいでしょ。」

「まあね、でも少し楽しいかも。」

「そう。」

「いやー、金沢はいいところだ。」

と、南と高山は浅野川橋を眺めながら歩いた。

送迎バスに乗った南達は、山代温泉へ。

山代温泉

「うわー、湯けむりがもくもくするぞら。」

「本当だわ。」

「何しろ、山代温泉は人気だからね。」

北陸でもっとも古いとされる温泉

古くから温泉街として栄え、

豊富な文化資産、伝統文化に恵まれている。

「山代温泉浴殿」は、共同風呂として全国屈指の広さを持つ。

「アー、いい湯だな。」

「これが加賀の湯ね。」

「俺も、気持ちいい気分よ。」

「この殺人は、高校で何があったかだ。」

「そこなんですよね。」

「もしかしたら、いじめか教師の体罰って事は。」

「それも考えられるな。」

「もう一度推理してみよう、東京都内で女子高生が亡くなった、そして兼六園で毒殺された。」

「もし、第2の事件が起きるとしたら。」

「能登かもしれんぞ。」

「そうか、能登で起きる可能性も。」

「ああ。」

「考えられるな。」

翌日、能登へ・・・ところが能登金剛と輪島の八方寺屋旅館では殺人事件が起るとは南と高山達は予想もしなかった。

次の日、南と高山達は観光バスに乗って能登へ向かった。

「みなさな、こちらが渚ドライブウェイでございます。」

「この道路は、海岸を走るのか。」

「そうだよ。」

能登金剛

「冬の能登半島は美しいわ。」

「気を付けろよ、大丈夫か。」

「ええ。」

そして、ツアー客は人が倒れてるのを見つけた。

「ねえ、あれ何かな。」

「どうした、雅美。」

「ねえ、この人死んでるわよ。」

「えっ、お、おい。」

「どうしました。」

「あっ、公安さん。」

「金剛で人が死んでるんです。」

「何だって。」

「はっ。」

「あっ、あれは。」

と、高山は驚いた。

「どうした、高山。」

「又か、第二の殺人が起きるとは。」

「とにかく、警察に連絡だ。」

「はい。」

「この、被害者は東京で起きた女子高生の事件と関係ありそうだな。」

「ええ。」

「この事件、何かあるぞ。」

第5章 4年前の事件

しばらくして、石川県警のパトカーが到着した。

「警部、被害者の身元が分かりました。」

「本当か。」

「被害者は、青藍高校の青山孝雄です。」

「それで、死因は。」

「恐らく死因は溺死だな。」

と、小沢警部は言った。

「又、高校生か。」

「これどういう事なんだ。」

「先週の月曜日に音ノ木坂学院の生徒が亡くなられたんです。」

「何、音ノ木坂学院。」

「はい。」

「この被害者の3人に共通する事って何なんだ。」

「やはり、高校で何かの事件が。」

「それは、考えられますね。」

と、鶴岡は言った。

「この事件は恐らく、いじめと体罰だ。」

「そうか、犯人は分ったんですか。」

「いや、犯人はまだわかっていない。」

「そうだな。」

「うん。」

「と言う事は、4年前の事件と関係してるな。」

高山はすぐに東京の鉄道公安室に連絡した。

「えっ、被害者の3人はいじめと体罰に関係しているのか。」

と、高杉は言った。

「ええ、どうやら被害者の3人は4年前のいじめと体罰に関係していると思われます、詳しく調べて見て下さい。」

「わかった、調べて見る。」

と、電話を切った。

「班長、何かあったんですか。」

「今、南から連絡が会った。4年前の事件の事を調べてくれって。」

「えっ、連続殺人の謎がわかったの。」

「ああ、そうだ。」

「東京と北陸で、女子高生が殺害されたって事ね。」

「よし、早速調べて見ます。」

「俺も行きます。」

「わしも行く。」

桜井は、菅原と三輪と一緒に4年前の事件を調べることにした。

南は、高山と小海と鶴岡と一緒に事件の推理をした。

「まず、兼六園の事件で殺害された谷川は名古屋から金沢までは「しらすぎ」に乗っていた事が分かった。」

谷川が乗った列車ルート

東京発 7時07分 東海道新幹線「ひかり3号」に乗車

名古屋着 8時58分

名古屋発 9時12分発 し特急「しらすぎ3号」に乗車

金沢着 12時07分

「そこから、兼六園に行ったんですね。」

「そうだ。」

「そして、谷川は毒入りの緑茶を飲んで毒殺された。」

「そして、第2の事件は青山は、金沢から七尾線に乗っていた。」

「ほう、それで。」

「彼は穴水で下車した。」

「なるほど、青山は能登金剛へ行っただって事ね。」

「そうか、誰かに突き落として溺死したのか。」

「うん、青山は犯人に突き落とされたとみて間違いない。」

「その通りだよ、鶴岡、小海。」

「それで、犯人は分ったの。」

「うん、この東京と金沢と能登で起きた殺人は4年前の事件と関係しているって睨んでるんだ。」

「じゃあ、犯人はこの中に。」

「ああ、私の推理通りならね。」

第6章 対決

そこへ、高杉班長から連絡が入った。

「あ、南か、わかったよ、4年前の事件の事が。」

「何か分かったんですか?。」

「ああ、拜戸町の拜戸中学校で4年前に林間学校で水難事故で生徒が死亡したんだ。」

「何だつて、じゃあこのツアー客には裏があつたのか。」

「そうだ、被害者の花型と谷川と青山は拜戸中学の卒業生だ。」

「と言う事は、4年前の事件に関係してるのか。」

「そうだ。」

「わかりました、早速調べて見ます。」

と、高山は携帯を切った。

「どうした。」

「ええ、4年前拜戸中学の林間学校で水難事故で男子生徒が犠牲になつたんだ。」

「で、その亡くなった生徒つて言うのは。」

「ああ、亡くなったのは塩尻啓介14歳当時中学2年生だ。」

「それで死因は。」

「恐らく川に転落したと、書いている。」

「と言う事は、この事件は4年前の事故と関係してると思われるが。」

「じゃあ、犯人はこの中に入るつて事か。」

「ああ、恐らくな。」

「わかったよ、こいつは偽名でツアーに参加している、本名は塩尻節子だ。」

「じゃあ、塩尻は那須 あやめで参加していたのか。」

「ああ。」

「もう1人の方は。」

「事故死した啓介の弟、塩尻真治だ。」

「じゃあ、この連続殺人犯人は。」

「この塩尻親子だ。」

「じゃあ、塩尻の居場所がわかったの。」
「ああ。」

「この、能登金剛にな。」

と、鶴岡は言った。

「よし、拳銃は持つてるな。」

「ええ。」

「よし、確保へ向かうぞ。」

「ええ。」

南と高山と小海達は、犯人がいる能登金剛へ向かった。

「誰だ、お前は。」

「私よ、覚えてる。」

「誰だよ、あんた。」

「忘れたとは言わせないわ。」

と、節子はナイフを構えた。

「こいつらが悪いのよ、こいつらが、水難事故を隠蔽したのは。」

「4年前の林間学校の事ですね。」

と、南と高山達は、拳銃を構えた。

「担任の坂口のせいで、うちの息子が死んだのよ。」

「じゃあ、花型と谷川と青山を殺害したのも。」

「そうよ、全部私と真治が計画したのよ。」

「やはり、事件の犯人はあんただったのか。」

「そうよ、うちの啓介を転落死したのは川遊びして死亡したとね。」

「それで、復讐したって事か。」

「そうよ。」

「それで、俺はこのツアーで偽名を使って参加していたのさ。」

「さあ、お前も能登金剛の中に地獄へ送ってやるわ。」

と、その時。

「そこまでだ、塩尻。」

「はっ、警察。」

「てめえ、警察だったのか。」

「半分当たり、鉄道公安隊だ。」

「塩尻節子、谷口雅代及び青山孝雄殺害陽気で逮捕する。」

と、小沢警部は二人を逮捕した。

「さすがですね、鉄道公安隊は。」

「ええ。」

「よし、行くぞ。」

と、塩尻親子は石川県警に連行した。

「これで、事件は解決ね。」

「ああ。」

金沢駅

帰りは、金沢から京都までは金沢発13時48分「雷鳥32号」に乗って京都から新幹線に乗り次いで東京へ帰京した。

こうして、金沢能登の連続殺人は水難事故の恨みの復讐と言う結末を迎えた。